

10	稲 沢	明治中学校	イトウ ヒロユキ
			氏 名 伊 藤 広 幸

分科会番号 19	分科会名 読書・学校図書館
----------	---------------

「読みたい」をつなげ、読書に親しむ生徒の育成
 ―読書の楽しさを知り、読書の幅を広げる実践を通して―

1 はじめに

生徒が多くの時間を過ごす学校は、読書習慣を形成していく中で大きな役割を担っている。学習指導要領では、言語活動の充実や学校図書館の計画的利用など、生徒の自主的、自発的な読書活動の充実することが示されている。また、第4次稲沢市子ども読書活動推進計画（令和7年）では、学校での読書活動において、「読書の楽しさを伝える」「学校関係者の意識の高揚と魅力あふれる読書活動」「読書習慣の確立」を目指している。具体的な取組として、「読み聞かせ」「ビブリオバトル」「ポップ作り」などの読書活動の実施や発達段階に応じた本の紹介、読書ボランティアとの協働などが挙げられる。

生徒がたくさんの本と出会い、読書の楽しさを実感することは重要なことである。しかし、実態として、日頃から本を借りたり、本を手にしたりする生徒は多くない。また、本のジャンルが偏り、読書の幅が限られている。

今年度も学校図書館の「読書センター」としての機能に着目し、読書活動の充実や魅力的な学校図書館運営を充実していく中で、読書の楽しさを知り、さらに読書の幅を広げることができる生徒を育成することを目指し、本研究に取り組んだ。

2 研究のねらい

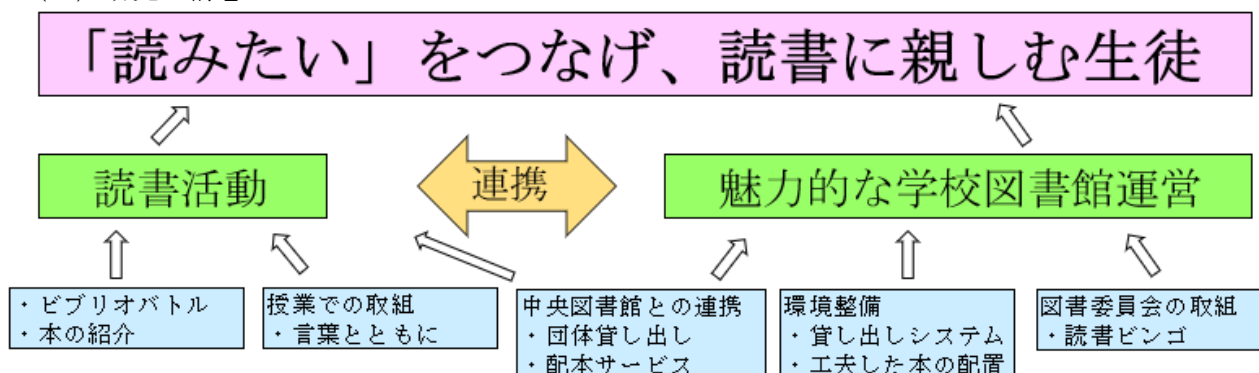
読書の楽しさを実感し、他者の読みたいと自分の読みたいをつなげ、読書活動の充実や魅力的な学校図書館運営をすることにより、自ら本を手に取り、読書に親しむ生徒の育成を目指す。

3 研究の方法

（1）研究仮説

生徒が本を紹介し合って、本の魅力を共有し、幅広いジャンルの本を読んだり、読書活動の充実や魅力的な学校図書館運営を図ったりすれば、読書の楽しさを実感し、進んで本を手に取り、主体的に読書に親しむ態度が育成されるだろう。

（2）研究の構想



4 研究の実態

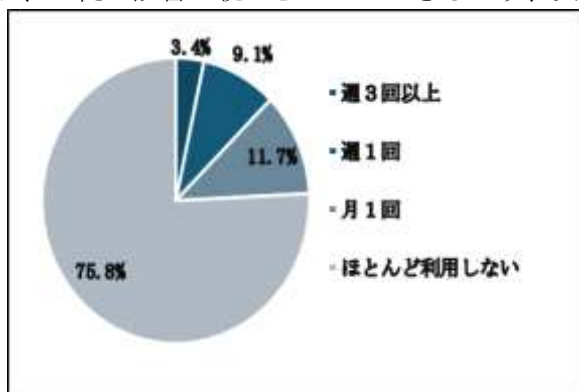
(1) 明治中学校での実践（対象生徒 全校281名・3年生102名）

① 実態

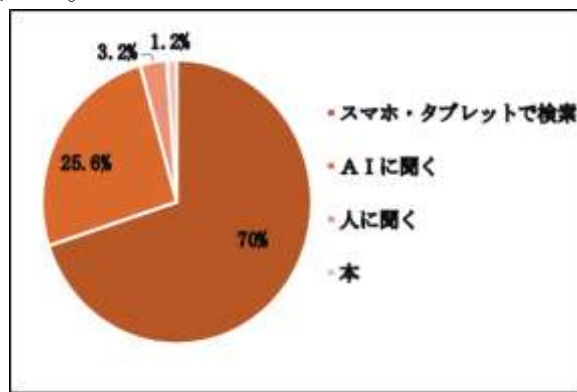
明治中学校の生徒は、読書が好きな生徒は6割を超えており、生徒にとって身近なものとなっている。しかし、事前アンケートでは、「図書室が開館しているときは、週のどのくらい利用しますか」の質問に対して、75.8%の生徒が「ほとんど利用しない」という結果となった（資料1）。休み時間の生徒の様子を見ると、校庭で友達と体を動かしたり、教室で友達と話をしたりする生徒が多く、読書をしている生徒はあまり見かけない。また、「よく読むものは何ですか」の質問に対して、マンガと答える生徒が7割を超えていた。

本校の3年生の生徒は「分からないことを調べるとき、何を使いますか」の質問に対して、7割の生徒が「スマホ・タブレットで検索する」という結果となった（資料2）。分からないことを本で調べる生徒はほとんどいなかった。

そこで、図書委員会のキャンペーンを行ったり、本に触れる機会を多く設定したりすることにより、生徒が読書に親しむことができるよう、実践を行った。



【資料1 学校図書館の利用頻度】



【資料2 分からないときに何をを使うか】

② 実践

<読書活動>

ア ビブリオバトル

日常的な読書のきっかけづくりとして、図書委員会のキャンペーンとしてビブリオバトルを行った。ビブリオバトルを行うにあたり、1カ月前から出場者を募集した。3名の生徒がバトラーとなり、1分30秒で本を紹介した。自分の好きな小説を熱く語る生徒、絵本の内容を分かりやすく語る生徒、授業で扱った俳句の本を力説する生徒、3人がそれぞれ思いを伝えた（資料3）。うなずきながら聞く観客や身を乗り出す観客もいた。



【資料3 バトラーの様子】

イ 3年生国語科「言葉とともに」

学校図書館にある俳句の本と稲沢市立中央図書館の団体貸し出した俳句の本を集めて教室前の廊下に置いた。俳句の説明が詳しく書いてある本や、漫画とともに俳句の内容が書いてある本など、俳句に関する本を選書した。俳句の授業に合わせ、生徒がすぐに手に取れるように環境を整え、4時間完了の俳句の授業を計画した（資料4）。

時数	学習内容
1	「俳句の可能性」 俳句の決まり事や形式を確認し、筆者の評価の仕方を捉える。
2	「俳句を味わう」 俳句に表現されている季節や情景、作者の思いを捉える。
3	「俳句の創作教室①」 廊下に設置した図書資料から、自分の気になる句を選び、鑑賞文を書き、グループで好きな句を発表する。
4	「俳句の創作教室②」 好きな句を参考にして、自分で俳句を作り、作ったものをチャット機能のあるアプリに投稿する。

【資料4 単元計画】

俳句の授業が始まると同時に、学校図書館や稲沢市立中央図書館にある俳句の本をブックトラックに乗せて学年の廊下に設置した。3時間目の授業が始まる前までに、廊下に設置した図書資料から自分が気になる俳句を本から1つ選ぶようにした。自分の気になる俳句の本の表紙と俳句のページを写真に撮った。

3時間目の授業では、自分が選んだ俳句についてプリントに記述した。プリントには俳句、季語、季節、切れ字、鑑賞文、自分の感想を書くように伝えた。詳しく調べたい生徒はタブレットPCも活用して、俳句に込められた思いなどをしっかり調べていた。1つ目の俳句を記述した生徒には、2つ目の俳句を選ぶように促した。複数の俳句の本を手に取り、自分が気になる俳句を探す場面が多く見られた（資料5）。気になる俳句を写真に撮り、1つ目の俳句と同じようにプリントに記述した（資料6）。その後、グループ内で自分の気になる俳句を発表し、一番良かった生徒がクラス全体に発表した（資料7）。



【資料5 俳句の本を読む生徒】



【資料6 俳句の写真を撮る生徒】



【資料7 グループ活動の様子】

<魅力的な学校図書館運営>

ア 読書ビンゴ

楽しみながら読書の幅を広げることを目的として、図書委員のキャンペーンとして読書ビンゴを行った。異学年で構成された縦割りのブロック対抗で行い、3つのブロックで競うようにした。普段読まないジャンルの本も読めるように、3×3のマスに、マンガ、歴史（社会科関連本）、科学（理科関連本）、料理（家庭科関連本）、絵本、青春、ライトノベル、スポーツ、ホラー&ミステリーの9種類のジャンルを示した。図書委員会がブロックごとに読書ビンゴ表を用意した（資料8）。本を借りる生徒は、図書委員に自分の名前を伝え、本の手続きがされ、その本のジャンルに1つポイントが追加されるようにした。1マスに3ポイントがたまったら、丸が付け

られる。また、チャット機能のあるアプリに借りた本の紹介文を書くと、さらに1ポイント加算されるようにもした。



【資料8 読書ビンゴ表を作る図書委員会】

イ 貸し出しシステム

稲沢市では一人一台 Chromebook のタブレットPCが配付されている。本校では、データを使って学校図書館の本の貸し出しを行っている。エクセルで作った図書台帳のデータを Google スプレッドシートに変換した。スプレッドシートに本に貼っている台帳番号と生徒番号（3年1組1番→3101）を入力すると、書名と生徒名が記録される。本を借りる生徒は、図書委員に自分の名前と本に記されている台帳番号を見せるだけで貸し出しができるシステムとなっている。

③ 結果と考察

＜読書活動＞

ア ビブリオバトル

昨年度に引き続き、ビブリオバトルを行った。1分30秒後には盛大な拍手に包まれた。観客は3人の熱い思いを真剣に聞き、最後に一番心に響いたバトラーに手を挙げた（資料9）。3人のバトラーのおかげで、「この本を読みたい」「もっとこの本を詳しく知りたい」「また、ビブリオバトルを開催してほしい」という声が多く聞かれた。今回は3人のバトラーしか集まらなかった。今後は多くのバトラーが集まるように図書委員の呼びかけを強化していきたい。



【資料9 バトラーに投票する様子】

イ 3年生国語科「言葉とともに」

俳句の本をすぐに手に取れるように廊下に置いたが、なかなか手に取る生徒が少なかった。そこで、本の配置を写真のように工夫して手に取りやすいようにした（資料10）。すると、登校後すぐの時間や休み時間に友達と一緒に俳句の本を見ている生徒の姿が見られた。俳句の授業の1、2時間目の後、しばらく日数を経てから3、4時間目を行った。時間があれば俳句の本を見るように声をかけた。



【資料10 陳列の工夫】

今回は俳句の本から、自分の気になる俳句を選んだ。生徒に本を使って調べることのメリットについてアンケートを実施した。その結果、「正確で信頼性のある情報を知ることができる」「情報が事実に基づいたものだと確証がもてる」「画面が暗くなることなく、そのページをじっくりと見ることができる」「考え方の幅が広がり、新たな知識を得ることができる」などの意見が出てきた。図書資料を用いることの良さを生徒は実感することができた。

4時間目は本から選んだ自分の気になる俳句をもとに、自分で俳句を作った。自分が書きたい内容をプリントにメモとし

て、いくつか箇条書きにして、それをもとに自分で俳句を作り、季語、季節、切れ字、自分の思いなどを書くよう伝えた。最初は俳句を作ることに抵抗を感じている生徒もいたが、友達と自作の俳句を詠み合う活動を取り入れることによって、少しずつ抵抗がなくなってきた。その後、自分の考えた俳句をチャット機能のあるアプリに投稿した。友達の俳句に感想や質問を書いたり、自分の俳句の質問に答えたりしていた。教師もコメントすることにより、質問の活性化につながった。(資料11・12) この活動を通して、楽しく俳句を作ることを味わうことができた。

＜魅力的な学校図書館運営＞

ア 読書ビンゴ

日頃、図書室を利用する生徒は少なく、毎回利用するのは限られた生徒になっている現状がある。読書ビンゴにより、利用者を増やそうとしたが、なかなか増やすことができなかった。そこで、図書委員の生徒が話し合い、昼の放送で呼びかけることとなった。読書ビンゴの途中経過を伝えたり、チャット機能のあるアプリに読んだ本の紹介文を投稿するとさらにポ

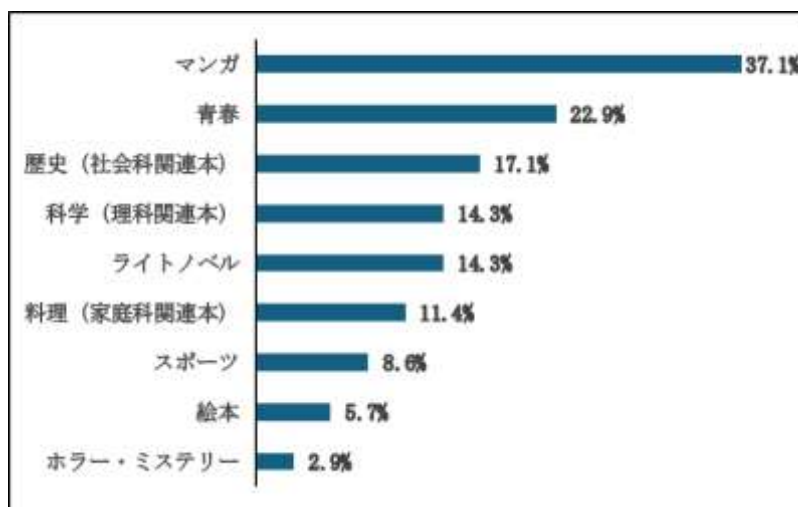
イントが加算されることを伝えたりして、少しでも本を読む楽しさを知ってほしいという思いを伝えていた。図書委員が自分のクラスで呼びかけをすることによって、少しずつ学校図書館を利用す



【資料11 チャット機能のあるアプリの様子】

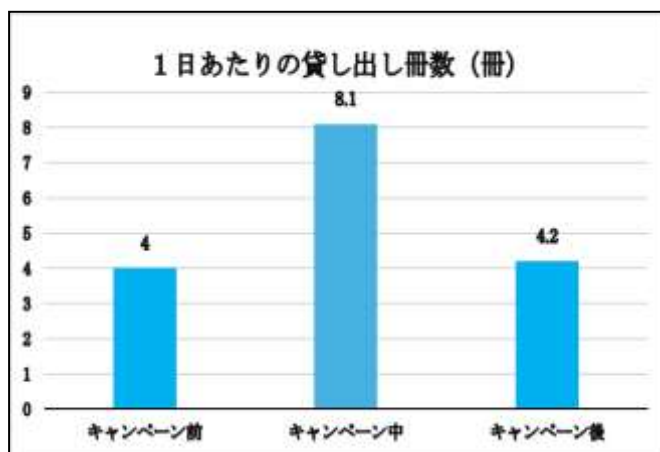


【資料12 チャット機能のあるアプリを活用している様子】



【資料13 よく読むジャンルの本 (キャンペーン後)】

る生徒が増えた。いつもはマンガばかり読む生徒も他のジャンルの本を読む機会が増え、読書の幅を広げることができた。キャンペーン前はマンガを読む生徒が7割以上いたが、キャンペーン後は他のジャンルの本を読む生徒が増えた（資料13）。読書の幅が広がったと言える。1日当たりの本の貸し出し冊数はキャンペーン中では8.1冊とキャンペーン前と比べて2倍近くの生徒が本を借りることができた。キャンペーン後はキャンペーン中に比べて大幅に減ったものの、キャンペーン前よりは本を借りる生徒が増えた（資料14）。



【資料14 貸し出し冊数】

イ 貸し出しシステム

デジタルで管理することにより、迅速な貸出をすることができた。最初のうちは、図書委員もこのシステムに驚いていた様子だったが、今では落ち着いて使いこなせるようになった。数字を入力するのみで進められるため、手軽で、本の管理がしやすいと言える。エクセルシートになっているため、人気の本を把握することができたり、人気の本から図書の購入計画を考えたり活用の可能性は、まだまだ広がると考えられる。明治中の人気の本ランキングを作って、図書室に来たくなる環境を作っていこうと考えている。

5 成果と課題

〈成果〉

- ・ ビブリオバトルをしたことで、今まで読まなかった本を「読んでみよう」というように「もつとこの本を詳しく知りたい」など読書への関心を高めることができた。
- ・ 授業の中で目的に応じた本を活用したことで、生徒は知識を広げたり深めたりすることができた。

〈課題〉

- ・ 図書委員会のキャンペーンにより、生徒の本を読む意欲を高めることができたが、それを継続していくことは非常に難しい。そのため、生徒の読書を習慣づけるためのさらなる取組を考えていきたい。

6 おわりに

今年度も、昨年度に引き続き学校図書館の「読書センター」としての機能に着目し、本に親しみ、読書の幅を広げることができるようビブリオバトルや図書委員会のキャンペーンなどの読書活動の充実や魅力的な学校図書館運営を進めることができた。

これらの実践を通して、読書の楽しさを実感し、読む意欲を継続するようにし、自ら本を手に取り、読書に親しむ児童生徒の姿が少しずつ見られるようになってきた。今後も、本実践を継続・発展しながら、読書活動と魅力的な図書館運営に力を入れていきたい。